

# インターンシップの就職活動への影響

—山口大学 2010 年度 4 年生へのアンケート調査と内定状況調査に基づく考察—

平 尾 元 彦

## 要旨

インターンシップ参加者へのアンケート調査によると、自身の就職活動への影響として、志望業界・企業への理解が深まることに加えて、大学生どうしの交流・社会人との対話を通じて意欲が高まることがあげられる。一方、体験したことによってその業界・企業への興味が薄れたとの回答もあり、将来的なミスマッチを回避する効果もみられる。内定率・進路決定率は、インターンシップに参加した学生の方が、そうでない学生より高い。大学3年生夏の経験が就業意識を高めて、結果として自らの進路選択に好影響を及ぼしていることが明らかになった。

## キーワード

インターンシップ 就業力 就職活動 内定率

## はじめに

インターンシップとは、学生が一定期間、企業等で行う就業体験のことであり、山口大学では、学生の就業力育成を目的とするインターンシップ教育に力をいれてきた。本稿は、これまでの取り組みを整理するとともに、学生へのアンケート調査・内定状況調査の結果を報告するものである。インターンシップの就職活動への影響を把握した上で、よりよいキャリア教育実現のための課題を明らかにしたい。

## 1 山口大学におけるインターンシップ

山口県では、山口県経営者協会が厚生労働省からの委託を受けて、インターンシップ普及のための事業を実施し、県内外の大学等の学生たちが県内事業所での就業体験に取り組んできた。この事業は2009年度にて終了し、同事業を引き継ぐかたちで山口県インターンシップ推進協議会が発足した。同協議会は、県内の高等教育機関および経済団体により構成され、山口大学の丸本学長が会長を務める。

行政機関・企業代表も加わって、県内事業所でのインターンシップを推進する機関である。会の目的は以下の通りであり、教育の質的向上と地域社会への貢献を掲げる。

山口大学のインターンシップ実績の多くはこの山口県経営者協会・山口県インターンシップ推進協議会を通じたもので、県内事業所での5日間以上の就業体験を基本とする。山口大学の参加学生は2004年度50人であったものが、2010年度には264人へと拡大している(図1)。以下本稿では、両機関によるインターンシップを山口型インターンシップと呼び、考察をすすめる。

### 山口県インターンシップ推進協議会(目的)

本会は、山口県の高等教育機関等、事業所、経済団体、行政機関が相互に連携・協力し、企業等へのインターンシップ事業を通じて高い職業意識の育成を円滑かつ効率的に推進し県内の高等教育全体の質的向上に資するとともに、山口県の経済・社会の活性化に貢献することを目的とする。

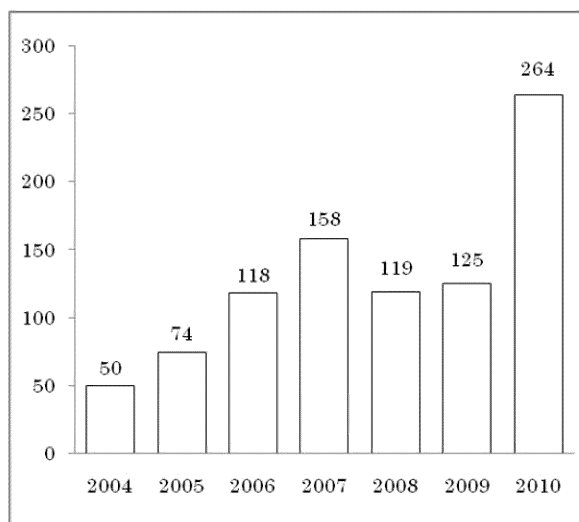


図1 山口大学のインターンシップ参加人数の推移  
(山口型のみ)

表1は直近二箇年の学部別実績である。2010年度は申込者326人、受入先とのマッチングができてインターンシップを実施した者が264人である。前年に比べて大きく拡大したのは、これまで山口県経営者協会の協力のもとに授業として実施をしてきた人文学部・理学部・工学部に加えて、協議会の発足にともない、学生支援センターが窓口となることで、全学部へと対象を拡大したことが主な要因である。

一方、就職ナビ等で募集する、いわゆる公募型インターンシップも幅広く実施されている。2000年代初頭に就職ナビの6月プレオー

プンがはじまり、夏のインターンシップ情報が提供されるようになった。今では6～7月に就職ナビでインターンシップ先をさがして、夏休み期間8～9月の体験が定着している。このタイプのインターンシップは学生が大学窓口を通さずに企業に応募するため参加実態はわかりにくい。山口大学では2010年からすべてのインターンシップ参加者に届け出をさせるようにした。これによると公募型インターンシップ参加者はのべ89人であった。ただし、1dayインターンシップなど気軽に参加できるものを中心に、届け出をしていない学生もいるとみられ、実態はこれよりも多いものと推察される。

## 2 アンケート調査

インターンシップの参加意識と就職活動への影響をさぐるために、2010年4～12月に就職支援室に来室した4年生・大学院2年生にアンケートへの回答を依頼した。回答総数は85人。人文学部24(28.2%)、教育学部4(4.7%)、経済学部41(48.2%)、理学部13(15.3%)、農学部3(3.5%)である。理学部・農学部にはそれぞれ大学院生1人ずつを含む。

インターンシップの参加経験への問いに対して、経験有りが62人(72.9%)、経験無しが23人(27.1%)であった。インターンシップに関するアンケート調査のため参加してい

表1 山口大学における山口型インターンシップ申し込み・マッチング状況

	2010年9月15日 現在							
	申込者数			マッチング数			マッチング率	
	2009	2010	対前年度比	2009	2010	対前年度比	2009	2010
山口大学合計	137	326	2.38	125	264	2.11	91.2%	81.0%
人文学部	66	66	1.00	59	60	1.02	89.4%	90.9%
教育学部	7	17	2.43	7	12	1.71	100%	70.6%
経済学部	6	105	17.50	6	88	14.67	100%	83.8%
理学部	33	34	1.03	29	23	0.79	87.9%	67.6%
医学部	0	0	—	0	0	—	—	—
工学部	18	51	2.83	17	41	2.41	94.4%	80.4%
農学部	2	31	15.50	2	21	10.50	100%	67.7%
大学院	5	22	4.40	5	19	3.80	100%	86.4%

注) 2009年度は山口県経営者協会、2010年度は山口県インターンシップ推進協議会による

ない学生が回答しづらい面もあって、このアンケートのインターンシップ参加率は約7割と、やや高めとなっている。以下、学生たちの回答をもとに意識をさぐっていききたい。

## 2.1 参加しない理由

はじめに、参加していない学生 23 人の参加しなかった理由をみておきたい。このなかで、応募したが選ばれなかった学生は思いのほか多くはない。公募型インターンシップは競争率も高く激戦である場合が多いが、学生たちは複数エントリーすることで、かつ、参加しやすい 1 day インターンシップを選択肢に入れることで、うまく行き先を見つけているようだ。

もともと興味がないという学生は少数で、「興味はあったが、ほとんど考えなかった」「興味はあったが、応募・エントリーできなかった」があわせて半数を超えるなど、興味

を持ちつつも行動に結びついていないとする回答が比較的多いことがわかる。その他の 2 名は、部活動優先・アルバイト優先との回答であった。

## 2.2 参加形態

次にインターンシップ参加経験のある 62 人の学生の結果をみていきたい。3 日間以上のインターンシップに参加したのは 34 人 (54.9%) で、なかには 2 回経験した 4 人も含まれる。このうち山口型インターンシップに参加したのは 21 人 (33.9%) であった。

一方、3 日間未満のインターンシップに参加したのは 35 人 (56.5%) で、1 回だけ参加した者が 21 人、2 回以上は 14 人である。就職ナビでエントリーして参加する 1 day インターンシップを中心に複数の会社に参加する例も珍しくない。なかには 10 社参加した学生もいた。

Q.【参加しなかった理由】 インターンシップに参加しなかった方におうかがいします。参加しなかった理由は何ですか？ 該当するものすべてに○をつけてください（複数回答可）

- |                           |   |         |
|---------------------------|---|---------|
| 1. 興味がなかった                | 2 | (8.7%)  |
| 2. 興味はあったが、ほとんど考えなかった     | 8 | (34.8%) |
| 3. 興味はあったが、応募・エントリーできなかった | 4 | (17.4%) |
| 4. 応募・エントリーしたが、選ばれなかった    | 4 | (17.4%) |
| 5. 応募・エントリーしたが、日程があわなかった  | 2 | (8.7%)  |
| 6. その他                    | 2 | (8.7%)  |

Q.【相談相手】 インターンシップに参加した方におうかがいします。インターンシップ先をさがすとき、応募書類を書くときなど、応募にあたって誰かに相談をしましたか？ 該当するものすべてに○をつけてください（複数回答可）

- |                                                 |    |         |
|-------------------------------------------------|----|---------|
| 1. 就職支援室の教職員・就職アドバイザー・YY ジョブサロン in 山大に、個別に相談をした | 8  | (12.9%) |
| 2. 就職支援室が開催するエントリーシート勉強会・面接練習会に参加した             | 4  | (6.5%)  |
| 3. 学部の教職員に相談した                                  | 5  | (8.1%)  |
| 4. 山口県若者就職支援センター（YY ジョブサロン）など外部機関に出向いて相談した      | 1  | (1.6%)  |
| 5. 先輩に相談した                                      | 5  | (8.1%)  |
| 6. 友人に相談した                                      | 15 | (24.2%) |
| 7. その他                                          | 4  | (6.5%)  |
| 8. 相談していない                                      | 28 | (45.2%) |

## 2.3 相談相手

インターンシップ参加者に、参加にあたって誰かに相談したかどうかを質問したところ、相談していないという回答が半数近くを占めた。また、相談した学生においても相談相手は「友人」との回答が多い。

自分が学びたいこと、経験したいことがどの会社で実現できるのか3年生の早い段階ではわかりにくい面もあるだろう。また、応募書類により選抜されるケースも多く、相手に伝わる文章を書くために就職支援室で開催するセミナーや個別相談を利用することを促してきたが、この年についてはあまり広がりを見せていないことがわかる。

## 2.4 就職活動への影響

インターンシップは“働く”ことを学ぶ機会であって、ここで学んだことは自らの就職活動に活かしてほしい。この観点から、インターンシップの参加が自身の就職活動にどのような影響を及ぼしているのかは、興味深いところである。

アンケート調査では8つの選択肢を用意して、あてはまるものを選んでもらった（複数回答）。最も多かったのは「志望する業界・企業への理解が深まった」で、50.0%の学生が自分の志望業界での就業体験を通じて理解を深めることができたという回答。一方、「インターンシップを体験することで、その業界・

会社への興味が薄れた」と回答する学生が25.8%存在することに注目したい。「自分の思っていた仕事と違った」「会社の方がすごすぎて自分ではできないと思った」など、インターンシップから戻ってきた学生からよく聞く話である。数日間の体験で判断するのは早いように感じることもあるが、将来のミスマッチを防ぐという意味では、方向転換も成果のひとつと言える。

友達が増えた、他大学の学生から刺激を受けたとの回答は、短期のインターンシップ参加者を中心に多く寄せられた。インターンシップは学生本人と企業との関係だけではなく、大学生どうしの交流の場ともなっており、就職活動の意識が高い友達をつくるためにインターンシップ参加を勧める声もある。

短期のインターンシップは比較的気軽に参加できることから、志望業界ではない会社にも参加していることが、学生の声から読みとれる。インターンシップに参加したことがきっかけで興味をもち、様々な活動を経た上でその業界に就職先を決めたとの話を聞くことも少なくない。とくに東京・大阪のインターンシップに参加した学生の声として、都会の学生の意識の高さ、情報の多さに驚いたことも報告される。1 day インターンシップは、グループワークを実施したり、ディスカッションを取り入れるなど、各社工夫がみられる。比較的多くの学生が一同に介するタイプが多

Q. 【就職活動への影響】 インターンシップに参加した方におうかがいします。インターンシップへの参加が、あなたの就職活動に与えた影響を教えてください。該当するものすべてに○をつけてください（複数回答可）

1. 志望する業界・企業への理解が深まった	31 (50.0%)
2. これまで興味をもっていなかった業界・企業への興味が広がった	15 (24.2%)
3. 社会人の方との会話に慣れた	13 (21.0%)
4. 会社の方との出会いによって、その後の選考が有利に進んだ	4 (6.5%)
5. インターンシップを体験することで、その業界・会社への興味が薄れた	16 (25.8%)
6. インターンシップに参加したことで、友達が増えた	19 (30.6%)
7. 他大学の学生から刺激を受け、就職活動の意欲を増した	20 (32.3%)
8. その他	4 (6.5%)

アンケート調査票の自由記入欄「後輩へのアドバイス」のなかから  
就職活動に及ぼした影響にかかわる学生の声（抜粋）

- ・ 私はインターンシップによって、業界理解というよりは、「働くこと」への理解が深まったように感じています。イキイキと働く方々を見て、自分もやりがいを感じることでできる仕事に就きたいと考えるようになりました。
- ・ インターンシップを通して、自分が本当に興味があるのがわかりました。いろいろな話を社会人の方とできるイイチャンスだと思います。辛いことも厳しいことも言われて涙をこぼしたことも多々ありましたが、そのおかげで就職活動への意識が高まりました。インターンは経験して損はないと思います。
- ・ 私はインターンシップに参加したことが、その後の就職活動に大きな影響を与える転機になりました。「こういう職場で働きたい」「こういう仕事をしたい」と思えるインターンシップだったと思います。自分が志望する企業や、またそうでない企業でも、自分自身を見つめ直す良い機会になると思います。
- ・ ○○業界は華やかだし楽しそうと思い、インターンシップに参加しました。とても勉強になったのですが、自分の考えが甘すぎたと感じました。華やかとはかけ離れて、体力勝負でとても大変な仕事でした（どの仕事も大変だと思いますが）。自分の目で確かめることのできる、とても貴重な経験ができました。
- ・ 自分の興味のある業界をより知ること、さらに志望度が高まることも良いことですが、「やっぱり違うな」と思えることも大きな発見です。インターンシップは実際の仕事に近い体験をすることができるので就職活動を進めていく上で企業ともミスマッチをなくすためのよい材料になると思います。
- ・ インターンシップに参加し、その業界をくわしく知ることができました。その結果、その業界には興味がなく、選考には進みませんでした。なぜ興味が無いのか、したい仕事だと思えなかったのか、考える良いきっかけになったと思いました。企業研究が自己分析につながりました。興味が無いと思っている企業のインターンシップに参加することも無駄ではないと思います。
- ・ 会社を知ることができるのはもちろんだが、インターンシップに参加することで「いよいよシューカツだ！」という気になれることが大切。また、友達もたくさんできると思う。シューカツの成功は「仲間」だと思うよ。
- ・ 1 day インターンシップは、会社説明会のようなものだったので仕事体験したいという人には向いていないと思います。友達ができるので、私は参加して良かったと思っています。特に、東京、大阪などの学生はたくさんの情報を持っていたり意識が地方の学生に比べて高いので。

注) アンケート調査票に記載された文をそのまま掲載するが、一部、業界名・固有名詞を省略している

く、他大学の学生との交流によって刺激を受ける場ともなっている。

選択肢の「その他」を選んだ学生の記述のなかには、「自己分析につながった」「会社の方の就職活動やアドバイスを教えてもらった」「会社の方と話をすることで、就職活動への意欲がわいた」があった。また、学生の声からもインターンシップ先の社会人との対話のなかから就業への意識形成がなされること

が報告されている。

### 3 インターンシップ参加と内定状況

2009年夏のインターンシップに参加した当時の3年生が、4年生になった2010年度の就職活動でどのような成果を得たのか、山口大学の文系・理系2つの学部の実績をもとに分析してみたい。両学部とも、インターンシップは就業を学ぶことを目的として必ずしも

専門性にとらわれない幅広い業界・企業での就業体験を推奨している。この年の山口型インターンシップに参加した文系学部 57 人、理系学部 25 人の就職状況を追跡した結果は次のとおりである。

12 月時点での内定率（就職希望者に占める内定者の割合）を見ると、文系学部ではインターンシップ経験者 82.7%、非経験者 45.4%で、参加実績がある学生の内定率が高い。理系学部は大学院への進学者が相当数いるため、進学を含む進路決定率をみておきたい。インターンシップ経験者の進路決定率は 76.0%、非経験者は 60.8%で、経験者が非経験者を上回る。これは 12 月の値であって卒業時点の数値ではないし、早く決まればよいというわけではない。このことを前提としても、インターンシップ参加者の方が高い内定率を示すことは興味深い事実である。もともと意識の高い学生、熱心な学生がインターンシップに参加している面はあるが、先のアンケート調査結果にもあらわれたように、就業体験が働く意欲・就職活動への意識を高める効果は大き

い。このことが高い内定率につながっていると思われる。

就職状況でもうひとつ検証したいことは、2010 年度から活動を開始した山口県インターンシップ推進協議会の目的のひとつに掲げられた「地域社会への貢献」に対する効果であり、地域への人材供給、すなわち、地元企業への就職促進が実現しているかという点である。ひとつの指標として内定者に占める県内企業の割合をみると、文系学部でインターンシップ経験者の値が上回るが、その差はわずかである。理系学部では非経験者の県内率の方が高い。もっとも理系学部の場合は大学院への進学を経て県内に就職する可能性もあることや、もともとインターンシップ参加学生に県内出身者が少なかったこともあって、この数値だけを見てインターンシップが県内就職につながっていないとみるのは早計だろう。いずれにしても、県内インターンシップが県内就職を促進しているという関係は、この指標からは見いだせない。

そもそもインターンシップは就職に直結す

表2 インターンシップの参加有無と内定状況

	文系学部			理系学部		
	インターンシップ 参加あり	インターンシップ 参加なし	合計	インターンシップ 参加あり	インターンシップ 参加なし	合計
対象学生	57	130	187	25	153	178
うち山口県内出身	19	29	48	4	35	39
就職希望者	52	97	149	18	72	90
就職内定者	43	44	87	16	43	59
うち山口県内	13	12	25	2	11	13
進学者	-	-	-	3	50	53
就職内定率	82.7	45.4	58.4	88.9	59.7	65.6
進路決定率	-	-	-	76.0	60.8	62.9
県内率	30.2	27.3	28.7	12.5	25.6	22.0

- 注) 1. 対象学生は2007年入学生の卒業予定者とする。過年度入学生（いわゆる留年生）はインターンシップの年次が異なる可能性があるためここには含まない。よって大学が公表する内定率とこの表は異なる  
 2. 2010年12月22日現在の内定状況であり、当該学年の最終数値ではない  
 3. 文系学部に進学者1名いるが、ここでは表示しない  
 4. 就職内定率は、就職希望者に占める就職内定者の割合（%）  
 5. 進路決定率は、対象学生に占める就職内定者と進学者の合計の割合（%）  
 6. 県内就職内定者は、山口県内に本社のある会社・団体への内定者、および、県内勤務を前提として内定したものの合計。県内率は、就職内定者に占める県内就職内定者の割合（%）  
 7. インターンシップの参加有無は、山口県経営者協会によるインターンシップのみ

るものではないので、これは当然の結果でもある。インターンシップが採用活動とつながることは、就職活動の早期化を促すとともに学生の幅広い選択を阻害する可能性があることから好ましいことではないが、一方でインターンシップは、知らない業界・知らない企業を知るための貴重な機会とも言え、ともすれば知名度のある会社に志望が集中する昨今の就職活動を大きく変える可能性も秘めている。地域社会への貢献という観点からインターンシップを地元企業への理解促進や就職活動にどのようにつなげていくのか、効果的な方策をさぐり実現していくことが課題となっている。

#### 4 課題と展望

本稿では、2010年度4年生の内定状況ならびにアンケート調査による学生意識を分析することによって、3年生のときのインターンシップが自身の就職活動にどのような影響を及ぼしているのかを分析した。これによるとインターンシップの経験が彼らの就業意識の高まりを通じて、就職活動に好影響を与えていることが確認された。

大学3年生、あるいは、それ以前の学年で実施するインターンシップは採用活動の早期化であるとの批判もある。そこに熱心になるばかりに学業がおろそかになるのは本末転倒だが、就職支援の現場でみるかぎり、今のインターンシップにその批判はあたらない。ほとんどが夏休み中の一定期間の体験であって、準備・実施後の振り返りを含めても通常のカリキュラムに多大な影響を及ぼしているわけではない。インターンシップに参加した会社から会社説明会の先行案内が来たり、直接声をかけられる例も耳には入ってくるが、その会社に就職するかどうかは別である。学生たちは学びの機会のひとつとしてインターンシップをとらえ、就職活動とは切り離して冷静に考えているし、企業においても同様である。

インターンシップに参加しないと就職活動で不利になるという話は、少なくとも本学においては聞いたことがない。

学生にとってインターンシップは、興味ある仕事を体験して確かめる、自分の可能性を広げるためにチャレンジする、社会人の方々と話をする、そして、大学生どうしの交流を通じて、自らの成長を促す学びの場なのである。学生の就業力育成の観点から、大学教育において積極的に取り組むべき教育メニューのひとつであると考えられる。

最後に、これからさらにインターンシップの効果を高めていくための山口大学の課題を指摘しておきたい。

##### ①学生の行動支援

インターンシップに参加しないのは、興味がないというわけではなく、行動につながらないからだということが、今回の意識調査から示唆される。応募先をさがす、応募書類を書く段階で止まる学生は少なからずいるようだ。そもそも意識の低い学生・行動できない学生はインターンシップに行くべきではないという意見もあるが、こうした壁をのりこえること自体が就業する力につながっていくことも忘れてはならない。2010年度の3年生からは、高年次向け共通教育科目の総合教養「キャリアと就職」のなかで全学インターンシップの情報を提供するほか、全学ガイダンスや個別相談会の開催などの取り組みが動き出した。一人ひとりの行動を支援するための教職員のさらなるかかわりが求められている。

##### ②多様なインターンシップの推進

大学には能力も志向も異なる多様な学生が存在する。インターンシップのほとんどが夏期休業期間中に行われるにしても、実習や集中講義、部活動や外国に出かける学生もおり、それぞれに都合がある。こうした学生たち一人ひとりの就業力を育成するという観点から

は、多様な学びの機会が必要となる。会社説明会と変わらないとの批判もある1 day インターンシップにおいても、工夫をこらしながら若者の働く力・働く意欲を見出す取り組みが数多くみられる。無理をしながら少人数を長期で受け入れるよりは、自社のできる日程・内容で若者の成長を促すメニューを提供する方が、効果的と言えるのではないだろうか。多くの学生に学びの機会を提供していくためには多様で多彩なインターンシップの実現が求められている。

### ③地元企業への理解促進

有名な会社、華やかな業界に志望が集中するのは今にはじまったことではなく、昔から大学生の就職活動にそういう要素はあった。人気企業にエントリーが集中するのに対して、インターネットが普及し、かつ、各地で合同説明会が当たり前のように開催される昨今において以前より情報は入手しやすくなっているはずではあるが、中小企業の採用難に変わりはない。

大学生が中小企業にアプローチしない理由は、「知らない」ことが大きい。多くの学生は就職活動ではじめて企業を知ることから、就職情報サイトでの露出の大きな会社が学生にとって有名な会社になってしまう。ナビに掲載されていない会社は採用募集してないというのは大きな誤解ではあるが、今の学生感覚からすると、これが普通なのである。

世の中にどのような仕事があるのか、会社とはどういう世界なのかを早い時期に知ることができ、学業と並行しながら自らの進路を考えることができる。3年生の夏休みはその大切な時期なのかもしれない。インターンシップ先を探すという行動は、この時点で会社を調べることになる。応募書類を書くことは、自分の考えをまとめることになり、学生たちが働くことを真剣に考える機会にもつながっている。

2010年4月に活動を開始した山口県インターンシップ推進協議会は、その目的に「県内高等教育機関全体の質的向上に資するとともに、山口県の経済・社会の活性化に貢献する」を掲げる。山口県では、これまでのインターンシップ事業の蓄積もあって、すでに多くの企業・官公庁等が学生を受け入れているが、さらに多く機関の参画を期待するとともに、企業理念や業務内容、インターンシップ受け入れポリシーなど、自社の情報をおおいに提供してほしい。このことが地元企業を知るきっかけとなる。

企業活動が活発になされ、そこに雇用が生まれ、学校を出た若者たちの活躍の場となる。こうした働く場の創出は地域づくりの根幹とも言えるだろう。地域社会が学生への就業体験の場を創っていくことは、就業力の育成と地元企業への理解を通じて、将来的に地域で活躍する人材を育成することにつながっていく。地域づくりの一環としてのインターンシップを、産学公連携して推進する必要がある。

(学生支援センター 教授)